

〈書評〉

陳碧霞 著

『近世琉球の風水と集落景観』

(榕樹書林, 2019年3月25日発行, 236頁, 5000円+税)

楊 珺 屹

琉球王朝は1429年に成立し、1879年まで450年間存在した王制国家である。その範囲は、奄美諸島の沖永良部島と与論島、沖縄本島および本島周辺の島、八重山・宮古諸島の石垣島や宮古島などの島嶼に及ぶ。本書は、琉球王朝時代にできた集落の景観について、東アジアの風水圏という視点から位置づけを検討し、琉球風水の特徴について、沖縄各地や中国などとの比較を試みている。特に、当時の中国と地理的に近いこともあり、本書のテーマである風水に代表されるように、生活様式や文化もその影響を強く受けてきたといえる。

本書では、琉球風水について「抱護」という概念に注目している。抱護は18世紀の琉球王国の政治家であり風水を学んだ蔡温（1682～1762）によって、風水思想と絡めて近世琉球の環境や生態の基盤として普及した。風水で重要なことは「気」を保護することで、抱護とは環境の生氣を護ることといえよう。つまり、抱護の本質は、樹木の内側に宿る生氣を大切に囲ったものである。沖縄に関する地理学の第一人者である仲松弥秀らは、腰当森（クサティムイ）を抱護としてとらえている。腰当とは、子供が親の膝の上で安らぐ全面的な安心感を示す語であることから、各地の村落を護るという意味が込められているが、ただの物理的な防風林や防潮林ではなく、日々の生活で心理的な安堵感を体感できるものだと考えられる。つまり、腰当森のある場所は、祖先の霊や神に護られた場所というわけである。抱護には、村抱護、屋敷抱護、浜抱護など特定の位置を限定する分類があるが、本書では村抱護を中心に検討している。

著者は、分析の指標として、琉球王国時代から現在の沖縄でも主要な構成樹種であるフクギの分布について明らかにしている。フクギは、フクギ科の熱帯性常緑の樹木で、楕円形の分厚い葉をつけている。根を深く張ることから、台風などの大風が吹いても倒れにくいので災害対策として植えられてきた。また、樹皮は黄色い染料として利用可能で、紅型（ビンガタ）や久米島紬では、独特の色調を醸している。さらに、植栽されたフクギの背が高く堂々としたたたずまいは美しく、とりわけ本部町備瀬地区のフクギ並木は圧巻で、琉球王朝時代の沖縄が完全に保存されている錯覚に陥りそうな景観美である。本書では、このような伝統的な集落景観である備瀬集落、稲嶺集落、真喜屋集落と多良間島・栗国島・渡名喜島をフィールドに選び、琉球風水について植生学的視点から示している。

現在も沖縄は精神性の高い地域だと考えられる。人生計画の指針をユタに相談し、地域の祭祀をノロに委ね、聖地であるウタキを崇め、家庭には守護神ヒヌカンを祀っている。日頃の生活でヒヤットとした間一髪場面では、マブイが落ちたと胸を撫でて、魂が抜けだしたと表現する。ま

た、「だからよ〜」という言い訳とも弁解ともいえる一言に宥恕する寛容さと優しさに触れることがある。抱きしめて護るという抱護にも絶対的な包容力のようなものを感じてしまう。本書は、沖縄特有の人間環境と社会環境を思い描きながら、風水が集落景観形成に与えた影響を考える最適の書だといえよう。

本書の目次は、以下のように構成されている。

- 第1章 序説
- 第2章 近年の風水に関する国際的研究
- 第3章 沖縄の文献学的風水研究史
- 第4章 風水集落景観と風水樹
- 第5章 沖縄の風水集落景観に関する植生学的研究
- 第6章 沖縄の風水集落景観 名護市真喜屋・稲嶺集落の事例
- 第7章 フクギ巨木の分布と風水集落の成立
- 第8章 沖縄の風水集落の景観要素
- 第9章 フクギ屋敷林の分布 渡名喜島を事例として
- 第10章 フクギ屋敷林の分布 本部町備瀬区を事例として
- 第11章 フクギ屋敷林の分布 栗国島を事例として
- 第12章 琉球列島におけるフクギ巨木の分布
- 終章 まとめと残された課題

第1章では、まず風水研究の意義について論じている。伝統的な環境情報として、1992年の地球サミットにおいて、持続的開発を進める上での規律と環境に関して蓄積されてきた伝統的な情報や知恵が再評価された。また、国連総会では2011年を国際森林年と定め全ての森林における持続的管理、保全・発展に関する認識を高めることを宣言し、中国風水が注目されるようになった。中国の風水地理ほど自然環境と人間との関係に密接した思想は、世界の中でもほとんど見られないからだ。著者は、風水とは景観を総合的に体系化した独特の思想で、安寧の居住地を確保するために最適な土地を選び出し、調和の取れた生活空間を形成することで幸運を呼び込もうとするという側面に加えて、景観マネジメントのアートだと主張している。

風水がアートだという論には、非常に斬新さを感じる。地形を長期的にわたり観察すると、自然の地形を流れる「気」を読み取り、環境や人間との調和を創造的に生きることが、生命の美しさを追求することだと容易に理解できる。

また、本章では風水の概念について9つの定義を紹介しているが、その中の2つの定義を紹介する。科学的視点を抛り所にするか否かで表現が大きく異なる。

「風水とは、宗教と科学が混同されたもので、単なる迷信であり、ナンセンスと子供じみたばからしさの寄せ集めである (Eitel, 1993/1873)」(11頁)。

「風水とは、物理的環境を概念化した、独特な総合的システムである。これは、最適な環境の中

で建造物（例：墓、住居、街）の調和を図り、ヒューマンエコロジーを統制しようとするものである（Yoon, 1976）」（12頁）。

これらの定義は、非科学的と揶揄されたものから、論理的なものへと移行した過程がみてとれる。風水に対する意識の形成は、純粋な思想としてとらえられ、多くの研究者によって研究が定義され、より実践的な方法として風水に対する住民の態度形成に大きく関与してきたと推察できる。

第2章では、近年の風水に関する国際的研究にふれ、人類学的、民俗学的研究、生態学、環境学的研究、建築学的研究について紹介されている。

長年、風水は迷信的、疑似科学、自然哲学というものだと考えられていた。1960年代に入ると、世界で発生する自然破壊や環境問題への関心が高まり、風水の生態学的機能が注目されてきたからだ。太陽光、強風軽減、洪水回避、水の利の選択など、文化や社会の発展における風水の役割が認められるようになってきた。このように、風水研究の傾向は、自然環境の危機に対する人々の意識の高まりにも影響を受けてきた。自然環境に深く関与する風水の思想に惹きつけられる研究者は多いものの、風水の研究業績としては中国の伝統的文化や建築と関連する研究が多く、風水のもつ機能的な効果が認められてきている。風水においては、人間は自然と調和しながら暮らすべきであり、人間による活動も自然とともにデザインすべきだとされている。また、地球環境を大切にす現代のエコロジー思想と、風水の生態学・環境学的な研究とが、非常に合致することから、環境保護主義者や景観建築家により称賛されてきた。そして、彼らはそれを実現しようと努力してきた。

著者は、多様な視点から風水に対する認知変容について述べている。文化的エコロジストにとっての風水とは、観念的で社会的なシステムであり、エコロジカルな知識の体系化だけでなく、強欲で近視眼的、あるいは身勝手に保守的な人々をコントロールするために作られた（Anderson, 1996）（29頁）という言葉質を支持しているように感じられた。それは、中国人である著者が、中国人は風水によって周囲の環境と調和し、不変のものを保っていると考えているからだろう。

第3章では、沖縄の文献的風水研究史について述べている。なかでも、琉球風水の特徴は抱護の応用で、山林育成および農地と住居環境保全のために実践的・機能的に活用されてきたことが詳記されている。興味深いのは、沖縄の風水師が上流階級の社会的地位にあったのに対し、ほかの東アジア地域では下流階級の地位にあったことだ。いくつかの研究において、抱護は沖縄の風水を紐解く上で重要な概念であることが確認されている。抱護という語は、中国語で書かれた『山林真秘』という書物に初めて登場する。

抱護とは生氣（生きたエネルギー）を貯めるために周囲を囲い込むことをいい、周辺の高山を指している。また、最新の研究では、抱護とは風水地理を応用した気を密閉する環境状態を意味し、地形・植生・植林によって有機的に形成された造林地および村落の防災機能をもつ。沖縄の自然環境に特化した実利・実用の歴史概念と定義づけられている。

さらに、沖縄の風水は実践的かつ機能的で、国家的な森林政策や土地改良と深く関わっている

ことに著者は注目している。抱護の閉ざされた形状は、山地での植林や村の人々の生活にとっても重要であり、琉球王国当時は風水の活用が、植林や農業生産で国家的経済成長戦略として重要な役割を果たしてきた。当時の数多くの植林で集落の景観が劇的に変化しと著者は指摘している。沖縄における風水は、ほかの東アジア地域の風水と比較すると、国家戦略として重要視されていたことがわかる。当時の風水師は集落の人々にとって技術的アドバイザーであり政治家でもあった。18世紀前半以降、集落配置には風水師が関わっており、集落が立て続けにすさまじい災害に見舞われると、地域の有力者は、集落の再配置に関する風水検分を王府に要請していた。人々は、気象衛星がない時代、いわゆる神の導きといった宗教的な要素に頼ったのだろうか。それとも、風水師による科学的根拠や経験の知恵といった合理的な説明を求めているのだろうか。これらのことについて関心が高まる。

4章では、風水集落の景観と各国の風水樹について述べられている。形势派の風水では、自然環境のアクセントとして、龍脈・砂・水脈・穴を地理的要因の基本としている。理想的な地形を見つけるヒントだといえるだろう。龍脈とは、長く曲がりくねった山脈のことである。まるで巨大な龍が躍動するような強い勢いがある地であることが最初のステップというわけだ。風水樹は常緑樹であると定義され、風水樹（単木）や風水林（集団）は、景観林、屋敷林、墓地風水林、信仰の対象と神聖なる古木、老木などに分類されている。著者は、東アジアの主要な風水樹について、先行研究と独自調査に基づいて中国本土6地域、韓国2地域、沖縄2地域にある主要な樹種について示している。著者は、Freuchtwang（1974）の、「風水樹は、風水に対する関心の中でも、最も普遍的で重要な要素である」という言葉を紹介している（53頁）。風水樹は、山脈による保護機能の代わりに役割を果たしつつ実践面における最も一般的な風水のシンボリック的存在であり、都市において唯一自然の営みを感じさせるものだと主張している。

著者は、各地における風水樹の風水的な重要性について述べ、各地域を集落・墓地・沿岸などの場所の細分化を試みている。これは、地域間差異を示す貴重な資料といえるだろう。一方で、中国、香港、韓国、沖縄の風水樹の特徴について詳細を述べ、なかでも沖縄の風水樹は、本書の重要なキーワードである抱護を軸に語られている。石垣島南部の平得村の古地図には、村を囲む樹林帯の形がドローンによる空撮のように鮮明に掲載されている。村の抱護や保護状況はビジュアル化することで、わかりやすくなっている。樹種は、フクギやリュウキュウマツを主に用いられているが、海岸エリアの浜抱護には、アダン、オオハマボク、クロヨナが用いられていることを示し、沖縄の風水集落でフクギがよく用いられているが、その経緯は不明であると述べている。

第5章は、多良間島を事例とした沖縄の風水集落景観に関する植生学的研究について述べている。多良間島は、宮古島と石垣島のほぼ中央に位置する平坦な地形の島で、島の内部は農業に利用されており、フクギ並木の緑と海の青が絶妙な自然景観の美しさを作り出している。これについては、フィールド調査と1945年に米軍が撮影した航空写真を活用した解説が明確である。

さらに、中国神話に登場し風水配置を象徴する四神である東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武については、東側にビトゥマタウガン（聖地）と塩川御嶽、西側にトゥカパナ（聖地）と

八重山遠見台、北側に腰当森、林帯による村抱護が南の朱雀が相応であると解釈している。著者は、これら東西南北の主要な道に沿って軸を交差すると、その交点にブンミャー（旧番所）が存在したことを発見した。ブンミャーは、風水では最高の立地であるとされており、まさに風水史上最適の場所に建造されていた。これは、極めて価値ある報告だといえよう。

第6章では沖縄の風水集落景観について、名護市真喜屋と稲嶺集落に注目し、25 cm以上のフクギを対象とした毎木調査を実施し、推定樹齢により4グループに分類している。また、風水師により1857年～1887年に風水鑑定がおこなわれた風水見分日記を参考に、当時の植林活動のコンセプトについて述べている。本調査から稲嶺地区の屋敷林で樹齢100年以上のフクギは253本あり、最も古いものは約298年であることが明らかになった。浜抱護にはマツを、村抱護にはフクギが用いられていたが、戦時中の防衛上の問題や昭和30年代以降の道路拡張のため海岸沿いの樹木が伐採された。今年は戦後78周年である。慰霊の日には「月桃」という歌が平和を祈るために、27年間歌われ続けている。しかし、現在もウクライナでは戦争が続き、人間は永遠の平和を願いながら、果てない戦争の現実を否定することはできない。伐採されたこのフクギや浜保護林を知り、評者は、人間の本质は容易には変わらず、とても寂しい思いがした。

第7章では、フクギ巨木の分布と風水集落の成立について、本島北部の備瀬と今泊、渡名喜島、粟国島で実施した調査を報告している。高さ800 cm前後の樹木を巨木としてとらえ、備瀬地域の平均が994 cmと最も高い。興味深いのは、先行研究によると備瀬地域の住民の94%もがフクギ屋敷を保存したいとの意向を示し、日常的なメンテナンスにも関わっているように推察できることだ。渡名喜島の事例では、樹齢200年以上のフクギは島東部に集中し、若い樹木は島西部にみられる。5つある拝所のうち4つが東部にあることから、おそらく住居地は東部から拡大したと思われる。評者は沖縄本島に複数回訪れたことがあるが、このようなフクギから集落形成を考えられる事例は珍しく、また今では、渡名喜島のフクギ屋敷林のエリアは、日没後も歩道を照らすライトアップが素晴らしく、幻想的な景色を楽しむことができる貴重な地域といえるだろう。

第8章では、風水集落の景観要素について、多良間島を事例に取り上げて述べている。都市計画や集落設立は、中国を筆頭に、韓国、香港、台湾などで風水理論を導入し、合理的な視点だけを優先するのではなく自然と人との調和を重要視してきたことである。加えて、本島を中心に、琉球諸島では抱護という村や屋敷や間切を護る森林帯があり、風水景観の配置を示すものでもあったと論じている。著者は、多良間島をフィールドに選んだ理由をとして琉球王朝時代に造成された「村抱護」の形が、ほぼ原形を保つように残されていることをあげている。現地でのフクギの調査方法は、DBH（胸高直径）が25 cm以上のすべてのフクギの計測を実施して、樹齢については、平田（2006）による公式 $[DBH (cm) + 2 \times 8]$ を用いて算出している（117頁）。また、村内の道路が直線ではなく直角に交差していないことに注目し、12本の南北道路は磁北から20～40度北東にずれ、17本の東西道路のほとんどは20～50度東から南東に曲がりくねっていることが明らかになった。これには、風水の影響があったと考えられる。気の流れからは、道路は直線ではなく曲線が好まれることからこの蛇行道路が完成したと考察している。

第9章では、フクギ屋敷林の分布について渡名喜島を事例として述べている。現在でも渡名喜島などには、屋敷林がよい状態で残され、各屋敷の60%がフクギ林によって構成されている。しかし、渡名喜島は、沖縄本島に移住した住民が多いため、屋敷林の手入れもされなくなっている。そのため、管理良好な屋敷林の樹木はある程度の大きさに生長したが、放棄された屋敷では低い木が密集し、林帯はほぼ自然な状態になっている。

第10章では、瀬備集落フクギ屋敷林の配置、直径、密度などについて調査している。集落内のフクギ屋敷林は、単層の林帯だが、海岸沿いは複層の林帯になり、木のDBHは、1cmから66.5cmまで、平均値は11.5cmだった。集落内で老木が集中している場所は、神屋敷などのある集落中央のエリアである。人口の増加とともに、家屋は海岸に近い地域に拡大しつつあったと考えられる。

第11章では、粟国島のフクギ屋敷林の構造を調べることで、他地域との共通項・特徴などを浮き彫りにした報告をしている。粟国島では、若木の定期的な剪定と木の最頂部の高さ調整が、第二次世界大戦以降も継続し実施されてきた結果、密度管理が不十分な渡名喜島や瀬備の屋敷林とは異なる人工的景観を呈している。粟国島の集落の特徴は、背後が丘陵地に位置し、海岸から遠く離れているため、海岸線に近い渡名喜島や瀬備のように、林帯の幅が広くとられていない。

9章～11章の特徴は、それぞれの現地で典型的な住宅地域を抽出し、樹高やDBHの頻度、DBHと樹高の対比について統計処理をおこない、分布曲線や散布図でビジュアル化しているので、地域内や地域間比較がわかりやすい。

12章では、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、奄美諸島の広範囲にわたるフクギ巨木の分布について述べている。沖縄諸島で最大のフクギ巨木は本島東部の浜比嘉島にあり、樹高15mで樹齢373年と推定している。浜比嘉島は、現在では、本島から陸路の海中道路で渡れる島である。琉球開祖の女神であるアマミキヨが久高島に降りたのちに夫であるシネリキヨと仲良く暮らした島とされており、1時間ほどで外周を徒歩で1周できる面積しかないが、拝所が30ヶ所ほどもあり、パワースポットとしても有名だ。浜比嘉島のこのフクギ上部の樹形は2つにまたがる合体木ともいわれ、夫婦愛を連想させる。著者は、先島諸島の残存フクギ巨木では西表島西部の千立集落を紹介しつつ、フクギ屋敷林の残存率は都市化の程度と負の相関にあることを示唆している。これは、戦争と人為的伐採が要因であることは明らかであろう。宮古諸島は、石垣と比較するとフクギ巨木ははるかに少なく、前述した多良間島だけに683本もの巨木が存在していると解説している。現在の奄美諸島は、鹿児島県南部に属する島嶼だが、沖縄からの文化や習慣の影響をあらこちらに感じられる。屋敷内で林帯として数多く植えられているのは、沖ノ永良部島と与論島で、最北部の奄美大島のほとんどの集落ではまとまったフクギの屋敷林は存在しないと報告しており、以南にある徳之島も同様にフクギは非常に少ない。これらから、琉球王国の支配下にあったときに、薩摩侵攻のあった1609年まではフクギの種子や若い木がもちこまれ残存していると著者は推察している。

本書の終章として、今後の研究課題を提示している。著者は、家屋建築の近代化や自動車社会への移行にともない、フクギ林が果たしてきた役割が忘れられ、フクギの屋敷林に囲まれた歴史

集落景観が消滅することに危機感を抱いている。また、本書では言及していなかったが、南根腐病、赤衣病やフクギノコクイムシなどの虫害にも警鐘を鳴らしている。伝統的集落景観を再評価しつつ、どう活用し、どう維持していくことが緊急の課題であろう。

本書は、抱護という、まさに沖縄のやさしさをそのまま表現したキーワードを中心に、ヒトとフクギとの関係性を実証的な視点から示した名著であるといえる。風水という歴史的命題についてフクギ巨木の数量化分析にも着手した本書は、これからの沖縄を考えるあらゆる研究者にとって貴重な一冊である。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程前期課程)